

北のとびら

vol. 107

平成28年1月



HOKKAIDO
ARTS FOUNDATION

特集 北海道戯曲賞

第1回大賞作品『悪い天気』

前田司郎演出で上演へ

アートのチカラを考える

近藤良平アート体感教室

街歩きアート

ダイナミックな農の風景を拠点に、
道東地域のアートを発信する人々

「中標津町」

フォト・エッセイ

前田司郎

表紙作家の紹介

大友真志



希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」
大賞受賞作品「悪い天気」公演

演出：前田司郎（五反田団主宰） 作：藤原達郎（飛ぶ劇場）
キャスト：中藤奨（無隣館）・山谷怜（霊6）・土屋梨沙

日時：平成28年1月29日（金）19:00開演／30日（土）14:00開演／31日（日）14:00開演
（開場は、各回開演の30分前）

会場：かでの2・7ホール（札幌市中央区北2条西7丁目）

入場料：（前売・当日ともに）一般1,800円 学生1,500円

問い合わせ：北海道舞台塾実行委員会事務局 ☎ 011-272-0501

●特集／北海道戯曲賞

第1回大賞作品『悪い天気』 前田司郎演出で上演へ

「セリフと語感のセンスが卓抜」「不条理な会話に理屈ではない実感がある」と審査員から高く評価され、平成26年度希望の大地の戯曲「北海道戯曲賞」の大賞を受賞した、藤原達郎さんの戯曲『悪い天気』。日常とは似て非なる不思議な作品世界が、五反田団を主宰する前田司郎さんの演出で舞台化されます。昨秋、さっぽろ天神山アートスタジオでワークショップ形式のオーディションが行われ、3人のキャストが決定しました。

ベンチで柿ビールを食べながらビールを飲む男1と女。そこに「私の眼鏡、知りませんか？」とやってくる男2。戯曲『悪い天気』はこの3人の会話によって展開する、日常のようでいてそうではない、奇妙な物語です。

キャストのオーディションが行われたのは平成27年10月。道内外から44名のエントリーがあり、1日約15名ずつ、2時間のワークショップの後に『悪い天気』の一場面を交代で演じる形で、3日間にわたり実施されました。

ワークショップ形式のオーディションというスタイルをとったのは、「せっかく集まってもらうのだから、オーディションだけでは申し訳ない」という演出家の前田司郎さんの考えから。場面を演じることで「演劇における俳優の仕事とはなにか」についてアプローチしつつ、「多様な演出、演技のあり方の中で演出家・前田司郎が面白いと思う芝居」を体験する機会となるワークショップが展開されました。



左から、山谷裕さん、土屋梨沙さん、前田司郎さん、中藤獎さん

俳優に課せられた 矛盾する二つの役割

「芝居は誰もができる。では、プロの俳優と素人の違いはなにか。ここに、演劇のあり方について考えるヒントがあると思います」と前田さん。

鍵となるのは「リアルさ」。例えば、カフェで見かけた面白いしゃべり方や動きをする店員をそのまま舞台上に上げて、リアルには見えないのだそうです。舞台は、そこが虚構の世界だということが基盤。現実世界で面白い人を舞台上に上げ

ると「面白がらせようとしてやっている人」に見えてリアルさを失ってしまいます。

では、舞台上のリアルさはどのように創られるのか。前田さんは、そこに俳優が果たす二つの役割があると説明します。

一つは「役の人物であること」。これは、悲しんだり喜んだりする自然な心の動きを持つ一人の人間として舞台上にただ存在するという役割です。

もう一つは「俳優であること」。これは、どのような場面なのか、そこで何が起きているのかを、身体を使って観客に説明する役割です。

演技の中で「俳優であること」が優勢であるとき、その場面は誇張的でわかりやすくなりますが、現実らしいリアルさからは遠ざかります。かといって「役の人物であること」に徹して現実と同じ動きをすると、説明が不十分でわかりにくくなり、観客は作品世界から置き去りにされてしまいます。

プロの俳優は、この矛盾する二つの役割を意識的に果たしつつ、稽古を通してリアルさを表現するバランスを探していくのです。

長試合のリアリティ」と前田さんは言います。

この八百長試合のルールが、演出家によって違うのが演劇。前田さん自身は「誇張的ではない、地味ではあるけれども『役の人物』が舞台上にいると感ぜられる演劇を面白いと思う」と言います。

キャスト決定！

「オーディションの短い時間では、俳優の本当の実力はわからない」と前田さん。今回は、3人の役者のバランスを重視して決定したそうです。選ばれたのは、札幌の俳優でコントユニットでも活躍している山谷裕さんと、昨年4月からこまばアゴラ演劇学校無隣館に所属している中藤獎さん。中藤さんは大阪で芸人として活動した経験を持っています。紅一点の女優には、北海道出身で、現在は関東の大学に在学する土屋梨沙さんが選ばれました。土屋さんは今回が初舞台。この3人と前田司郎さんが創り出す舞台『悪い天気』の完成に向けて、1月8日から稽古が始まっています。



八百長試合のリアリティ

並んだパイプ椅子に座る男女4人。「これはどんな場面でしょう?」との問いかけに、「電車」「病院」「銀行」「葬式」などの声が上がります。「このように、『並んでうつむいて座っている』という情報があれば、お客さんが場面を想像してくれる。『見立て』は、演劇の効果の一つ」と前田さん。ワークショップでは、参加者が交代で電車の中の場面を演じつつ、「役の人物」と「俳優」の役割、それぞれが優勢になっているケースを前田さんが解説していきます。

「俳優はセリフを伝えるほかに、台本に書かれていない部分を考えて情報を伝えなくてはならない。例えば、驚いた、申し訳ないと思った、悲しいと思った、など。セリフの外側にある、もやもやとした部分を作ることに俳優の領域がある」

脚本があるので、俳優は先の展開を知っている。けれども「役の人物」は知らないのです、舞台の上で本当に怒ったり悲しんだりする人物として存在しなくてはなりません。「演劇のリアルさとは、いわば八百



天神山緑地内にあるスタジオがオーディション会場に



前田司郎さんからのコメント

演劇という物語を楽しむものとお考えの皆さまもいらっしゃるかもしれませんが、「悪い天気」は音楽のように俳優の会話を聞いて楽しむ戯曲だと思います。深く考えず楽しめると思うので、普段舞台上に足を運ばない方も是非いらしてください。

北海道戯曲賞の受賞作品です。九州出身の作家と東京出身の演出家が、創っています。北海道の演劇人は是非ご覧ください。そして、つまらなければ「ふざけるな」と怒り、面白ければ「くやしい」と思って、来年の北海道戯曲賞に応募してください。

身体を使った関わりあいを楽しむこと

学生服の男性たちがパワフルに踊りコミカルに魅せるダンス集団「コンドルズ」を主宰し、自身もダンサー・振付家として、舞台や映像で幅広く活躍する近藤良平さん。北海道文化財団では平成20年度から毎年「アート体感教室事業」の講師として北海道に引き、各地で子どもたちとのワークショップを開催してきました。平成27年12月、旭川市で講師を務めた近藤さんに、ワークショップの活動とダンスの力についてお話を伺いました。

僕のダンスは、一般的にはコンテンポラリーとカテゴライズされま
す。けれども、そういった境界す
らも越えた大きな定義の「ダンス」
だという感覚が僕にはあって、ワー
クショップはこの「ダンス」を実践・
共有する機会です。
ダンサーとしての僕の活動には
大きく2種類あって、一つは舞台
で観客に見せるために作品を創っ
て踊る、表現としてのダンス。も
う一つはコミュニケーションとし
てのワークショップです。
最近では、小学生や大学生、
サラリーマンや障がい者など様々な
方を対象に、年間100回くら
いはワークショップの講師を務めて
います。でも僕には「先生」とい
う感覚はないんです。ダンスの世
界では先生が絶対で上達が目的で
あることが主流ですが、効果や目
的を考えないやり方があってもい
いですよね。今回の旭川のワーク
ショップでも、嬉しいことに子ども
たちは「恥ずかしさ」よりも「身

近藤 良平 (こんどうりょうへい) ダンサー・振付家・コンドルズ主宰

1968年東京都出身。バレエ、チリ、アルゼンチン育ち。第4回朝日舞台芸術賞寺山修司賞受賞。NHK「サラリーマンneo」、NHK連続テレビ小説「てっぺん」オープニングなど振付・出演。野田秀樹演出、NODA MAPの舞台「THE BEE」で役者デビュー。桜美林大学、横浜国立大学、立教大学非常勤講師。著書に「近藤良平という生き方」「エンターブレイン」『からだどと心の対話術 14歳の世渡り術』(河出書房新社)がある。北海道文化財団アート体感教室事業のアーティストとして、道内各地の子どもたちとワークショップを行っている。愛犬家。

体を使って遊びたい」がどんどん大きくなって、それを我慢できずに「もっとうしろしたい」と対等に主張するようになりました。
期間の短いワークショップの場合、振付を覚えて一曲を仕上げることができません。例えば並んで人形を受け渡していく動作だとか、組み体操のような動きなどを一緒に楽しんで、それがそのまま素材化してダンスになっていきます。そして、踊る時間と、踊りを観る側になる時間を設ける。私が踊って、あなたが踊って、それぞれが輝く時間があって、みんなが踊る。誰もが関わりながら、そこに存在できる。それが僕の考

えるダンスコミュニケーションの世界です。
現代は、目的が求められる時代、ネットを介したバーチャルコミュニケーションが多い時代です。ダンスのワークショップは、勝負や成果に捕らわれず、ただ身体を使って一緒に楽しむ時間、身体を使ったプリミティブなコミュニケーションをする機会であることに、意義があると考えています。



東一条ギャラリー

1階に「俵真布」というパン屋がある、古い建物の細い階段を上ると、ステンドグラスがはめこまれた赤い扉があらわれます。ここは、中標津の市街地に初めて作られたギャラリー。中標津および周辺地域の作家の作品展示のほか、クラフト教室の会場としても使われています。オーナーを務めるのはステンドグラス作家の浅沼久美子さん（羅臼町在住）。室内のガラスを飾るのはご自身の作品です。



実は、佐伯農場の佐伯雅視さんが仕掛人です。作家たちとのつながりからこのスペースが生まれました。「創作につなげるギャラリー」をコンセプトに、展示だけでなく、企画に合わせたワークショップも多数開催。訪れた人に、自分で考え創り出す喜びを教えてください。



内装に廃材を利用するなど、プリコラーージュという、有り合わせの素材で新しいものを創ることを大切に空間

- 中標津町東1条北1丁目16 俵真布2階
- ☎0153-74-9110 (俵真布内)
- 開廊日 土・日・月曜
- 開廊時間 11:00~17:30
- e1gallery.web.fc2.com

ギャラリー残日舎

クラシックやポピュラー音楽が流れ、版画や洋画、日本画などが並ぶ落ち着いた空間。ここは志道昇さんが約35年かけて収集した美術品を展示するギャラリーです。

画家志望だったという志道さんが、自らの眼を信じ集めたコレクションは約300点。特に、木版を中心とした各種版画作品、そして焼物では備前焼、黄瀬戸などが充実しています。常設展のほか企画展も開催しており、2016年3月まで、中標津町在住の版画家・細見浩さんと、書家・小梨滴翠さんの企画展が行われています。



常設展は掛け替えを行いながら展示。希望者には販売も行っている

「一般的な画廊や美術館とは違う、ゆっくり休める場所にしたかった」という志道さん。窓際のカウンター席でサービスのお茶をいただきながら自由な時間を過ごすのも、美の楽しみ方のひとつです。



- 中標津町緑町南1丁目2-18
- ☎090-9754-7013
- 開廊日 土・日・祝日
- 開廊時間 11:00~18:00 (土) 11:00~17:30 (日・祝)
- 入場無料

Column

中標津町総合文化会館「しるべっと」

文化会館、公民館、図書館の機能を有する複合施設として平成7年にオープン。愛称の「しるべっと」は、「標(しるべ)」が導きとして「知る」に通じることから「知るスポット」という意味が込められています。なかでも「大ホール」は、プロによる演劇や音楽などを上演する劇場でもあり、町民が本場の舞台を目の当たりにできる空間です。また、文化人を招いての文化講演会では、館を運営する文化スポーツ振興財団の職員と町民が協力して舞台セットを手作りするなど、町民が直接携わることができるのも特徴です。

さらに、公演等で招いたアーティストが地域の小学校で出張授業を行う「アウトリーチ活動」も積極的に実施。しるべっとは、町民が「本物」に触れる体験の拠点となっています。



解剖学者・養老孟司さんの文化講演会

- 中標津町東2条南3丁目1-1
- 一般財団法人中標津町文化スポーツ振興財団
- ☎0153-73-1131
- www.zncs.or.jp/shirubetto/

毎日の器に遊び心を

開陽窯

市街から車で約15分、陶芸家・藤田直平さんの工房は、開陽台への道の途中にあります。この地区は、かつて殖民軌道という馬鉄が通り、大変栄えていました。藤田さんが開陽の地に開窯したのは約30年前のこと。独立前は、江別市にあった野幌工業試験場の研修生として、土・灰・釉薬の調合の色を比べるテストピースも作っていました。道内の粘土の採取なども行った工業試験場での経験が、現在の作品づくりに大きな影響を与えています。

藤田さんの器は、素朴ななかにも、数式のような模様や落書きのような飛行機など、ちょっとした遊び心があるのが特徴。奥様の隆子さんのスペイン風料理のお店「バル ゴジュウカラ」でも使われており、料理とともに藤田さんの世界を味わうことができます。

- 中標津町字開陽448-15
- ☎0153-74-2361
- *ショップ併設。要連絡
- バル ゴジュウカラ
- 中標津町東1条北1丁目
- (東一条ギャラリーと同じ建物内)
- ☎090-2072-7205
- 営業時間 18:00~23:00
- 定休日 日・月曜(不定休あり)



併設されたショップでは、器のほか、動物型のオブジェなどユーモラスな作品も見られる



ダイナミックな農の風景を拠点に、道東地域のアートを発信する人々

【中標津町】

どこまでも広がる牧草地で、のんびり草を喰む牛たち。道東の代表的な酪農地帯でありながら、根室内陸部の中心地である中標津町には、アートに関心を寄せる人も少なくありません。大自然を切り拓き、広大な農の風景が創りだされたこの地には、独自の基準を持ち、個性的な活動で地域のアートを発信する人々が暮らしています。

農場全部が、アート作品

佐伯農場

「佐伯農場」農場主の佐伯雅視さんは、乳牛を100頭以上飼育する酪農家。同時に、農場をアートの発信基地として敷地内に数々の施設を作り、幅広いアーティストと交流して、作品の展示を行っています。

「地域ゆかりの、あまり知られていない作家を紹介したい」と、最初に作ったのが「荒川版画美術館」です。農場レストランの先駆けともいわれる「牧舎」に飾っていた、中標津町在住の版画家・細見浩さんの作品をはじめ、国後島の作品で知られる根本茂男さん、佐伯さんの恩師だった松本五郎さん、そして、佐伯さんが今注目している新進気鋭の作家・富田美穂さんの、4名の版画作品を常設展示しています。独特の円形の建物は、古いサイロの上部を再利用したもの。実は、敷地内のほとんど



農場内を流れる荒川沿いに建つ「荒川版画美術館」。牛を題材に作品を制作する富田美穂さんの展示が好評

- 中標津町字俣落2000-2
- ☎0153-73-7107
- 開館時間 10:00~17:00 (4月下旬~10月末) 10:00~15:00 (11月~4月下旬)
- 入場無料



「ギャラリー倉庫」では、宮島義清さんと佐伯さんが共同制作した牧草ロールアートも展示



の建物を、佐伯さんが廃材などで手作りしています。つまり、農場全体が佐伯さんの作品でもあるのです。

元農機具倉庫の「ギャラリー倉庫」では、毎年、農場に数カ月滞在し制作活動をしている木彫作家・宮島義清さんの作品などを展示。そのほか二部黎さん、中江紀洋さんといった著名な作家の木彫作品、ステンドグラス作家・浅沼久美子さんのガラスアートや絵画作品など、ジャンルを問わず佐伯さんがいいと思ったもので溢れています。

「帰農館」は、昭和40年代の中標津の子どもたちを撮影した教師・前田肇さんの写真の展示館です。子どもたちの生き生きとした表情と、開拓期の農村の風景に、どこか懐かしさを覚えます。

これら施設のまわりにも、アート作品が置かれています。無造作に積んである薪は、ガラスの目・鼻・口を入れてあり、薪を使うごとに表情が変わります。また、佐伯さんが代表を務める、中標津から弟子屈までの牧場地帯を歩いて旅する「北根室ランチウェイ」の活動とアートを組み合わせた作品も置かれています。

「農の中には、アートになるものがいっぱいある」という佐伯さん。本当に「いいもの」が溢れる農場のアート空間は、不思議と何度でも訪れたいくなるに違いありません。



上/昭和35年、雪印乳業の集乳所として建てられた建物を利用した「帰農館」

左/農場は「北根室ランチウェイ」のトレイルコースにもなっていて、「歩く旅」をテーマにした作品も置かれている

表紙作家の紹介



ホルムスク 2008

大友 真志 写真家

Masashi Otomo

1978年 北海道北広島市生まれ
1999年 専門学校東京ビジュアルアーツ写真学科卒業

[個展]

- 2011年 「サハリン島」(photographers' gallery/東京)
「GRACE ISLANDS—南大東島、北大東島」
(photographers' gallery/東京)
「書架—father's books」(IKAZUCHI/東京)
- 2010年 「Mourai 1~13」(IKAZUCHI/東京)
- 2008年 「Northern Lights 3 大東島」
(photographers' gallery/東京)
「Northern Lights 2 姉」
(photographers' gallery・IKAZUCHI/東京)
- 2007年 「郁子」(photographers' gallery/東京)
「書架」(photographers' gallery/東京)
「mid field」北海道北広島周辺の
(photographers' gallery/東京)
「Northern Lights 1 母と姉」
(photographers' gallery/東京)
- 2006年 「海境」(photographers' gallery/東京)
- 2005年 「overflow」(photographers' gallery/東京)
「overpast」(IKAZUCHI/東京)

[グループ展]

- 2015年 もうひとつの眺め[サイト]
北海道発：8人の写真と映像(北海道立近代美術館/札幌)
- 2009年 サハリンを読む—遙か [樺太] の記憶(北海道立文学館/札幌)
- 2006年 ICANOF Media Art Show 2006 「TELOMERIC vol.3」
(八戸市美術館)
- 2005年 「借りた場所、借りた時間 photographers' gallery
横浜展」(BankART studio NYK/横浜)
- 2004年 「火の国展—photographers' gallery exhibition」
(熊本県立美術館分館展示室3)
- 2002年 「第20回写真ひとつぼ展」
(Guardian Garden 銀座/東京)
- 1998年 「SHORT PEACE」(プレイスM/東京)

[出版]

2011年 『GRACE ISLANDS—南大東島、北大東島』(KULA)

[受賞]

2002年 第20回写真ひとつぼ展入選

[その他]

2005-2011年 『photographers' gallery press no. 4~10』編集
(no.8は責任編集)

◎北海道文化財団アトスペース企画展 vol.28

大友真志展「Mourai」
会期：平成28年1月12日(火)～3月18日(金) 9:00～17:00
休館日：土・日・祝日 ※都合により臨時休館する場合があります。
会場：北海道文化財団アトスペース
(札幌市中央区大通西5丁目11 大五ビル3F)
入場料：無料



精進川 2015



精進川 2014



フォト・エッセイ ⑪
文/写真 前田 司郎 Shiro Maeda

黄色と赤色

北海道戯曲賞の審査に今年も来ている。二十二時過ぎに新千歳に着く飛行機を予約していただいていたが、東京での仕事が多く終わったので、便を変更して二十時過ぎには新千歳に着いた。お目当ての店がある。そこで夕飯を食べようという考えだ。北海道に来たからには何かしら北海道らしいことをして帰りたい。これが例えば京都とか名古屋だったら、ただ仕事だけして帰るのでも全く気にならないのだが、北海道だと、どうしてだろう？ そう思う。札幌の駅に着いて、急いで乗り換えて大通駅で降りて、ホテル近くの目当ての店を探すが、無い。僕の勘違いで、店は札幌駅の側だったのだ。迷いに迷って店に着いた頃には二十二時。閉店していた。大荷物とを担いで悲しみにくれないながら、どこかで何か食べなくちゃと入ったのはチェーン店の居酒屋で、「それでも東京よりは美味しい」と自分なりに聞いてウニいくら丼を食べた。黄と赤が美しい二色の丼。



前田 司郎 (まえだ しろう)
劇作家・演出家・俳優・小説家・劇団「五反田団」主宰

1977年東京生まれ。1997年、劇団「五反田団」を旗揚げ。2004年「家が遠い」で京都芸術センター舞台芸術賞を受賞。2005年『愛でもない青春でもない旅立たない』で小説家デビュー。2007年、小説『グレート生活アドベンチャー』が芥川賞候補となる。2008年、戯曲「生きてるものはいないのか」で岸田國士戯曲賞を受賞。2009年、小説『夏の水の半魚人』で三島由紀夫賞受賞。近年はテレビ・映画のシナリオや演出も手掛け、2015年、「徒歩7分」で向田邦子賞受賞。近著に『私たちは塩を減らそう』(キノブックス)、『口から入って尻から出るならば、口から出る言葉は』(晶文社)他多数。

「美味しい、やっぱり北海道のウニいくら丼は違うなあ」とニヤニヤしながらビールを飲んだが、北海道以外でウニいくら丼なんて食べたことないことに気がついた。味の違いないって判りもしない。でも、いいのだ。実際に美味しいか不味いかなんて問題じゃない。美味いと決めて食べたなら美味しいのだ。人が人を好きになるのと一緒で、リトマス試験紙のように青になったらアルカリ性みたいには判然としな、赤かろうが青かろうが、好きになつたら好きなのだ。

財団事業インフォメーション (平成28年1月～3月)

アートシアター鑑賞事業

●富良野GROUP「屋根」
幕別公演

日時:平成28年1月30日(土)
14:00開演(13:30開場)
会場:幕別百年記念ホール
(幕別町千住180)



問い合わせ:幕別百年記念ホール事務局
☎0155-56-8600 ※入場料は直接お問い合わせください。

●デュークエイセス

○沼田公演
日時:平成28年2月12日(金)
18:30開演(18:00開場)
会場:沼田町民会館
(沼田町南1条1丁目9-11)



問い合わせ:沼田商店 ☎0164-35-2545

○赤平公演

日時:平成28年2月14日(日)14:00開演(13:30開場)
会場:赤平市交流センター(赤平市泉町1丁目1番地33)
問い合わせ:NPO法人アートステージ空知

☎0125-23-6330

※各公演の入場料は直接お問い合わせください。

●ONEOR8「そして母はキレイになった」

○士別公演
日時:平成28年2月13日(土)
19:00開演(18:30開場)
会場:あさひサンライズホール
(士別市朝日町中央4038)



問い合わせ:あさひサンライズホール
☎0165-28-3146

○苫前公演

日時:平成28年2月15日(月)19:00開演(18:30開場)
会場:苫前町公民館(苫前町字古丹別187-15)
問い合わせ:苫前町公民館 ☎0164-65-4076

○北広島公演

日時:平成28年2月17日(水)18:30開演(18:00開場)
会場:北広島市芸術文化ホール(北広島市中央6丁目2番地1)
問い合わせ:北広島市芸術文化ホール
☎011-372-7667

○伊達公演

日時:平成28年2月19日(金)19:00開演(18:30開場)
会場:だて歴史の杜カルチャーセンター(伊達市松ヶ枝町34番地1)
問い合わせ:NPO法人伊達メッセ協会
☎0142-22-1515

○富良野公演

日時:平成28年2月21日(日)14:00開演(13:30開場)
会場:富良野演劇工場(富良野市中御料)
問い合わせ:富良野演劇工場 ☎0167-39-0333

○北見公演

日時:平成28年3月1日(火)19:00開演(18:30開場)
会場:北見芸術文化ホール(北見市泉町1丁目3-22)
問い合わせ:北見芸術文化ホール
☎0157-31-0909

※各公演の入場料は直接お問い合わせください。

文化の宅配便事業

●トリオアンジュエ
留寿都公演

日時:平成28年2月12日(金)
18:30開演(18:00開場)



会場:留寿都村公民館(留寿都村字留寿都206番地1)
入場料:無料

問い合わせ:留寿都村教育委員会 ☎0136-46-3321

若手芸術家発表事業

●デュオトロイメライ 名寄公演

日時:平成28年2月15日(月)
18:30開演(18:00開場)

会場:名寄市民文化センター
(名寄市西13条南4丁目2番地)

入場料:一般500円
(高校生以下無料)



問い合わせ:名寄市民文化センター ☎01654-2-2218

北海道舞台塾

●平成27年度希望の大地の戯曲
「北海道戯曲賞」受賞作品決定

全国から応募のあった76作品の中から、第1次・2次審査を経て、本年度は次の作品に決定しました。

大賞 該当なし

優秀賞 「ばくのおばさん」 池田 美樹(熊本県)
「終わってないし」 南出 謙吾(東京都)

【第2次審査員】(50音順)

長田 育恵(演劇ユニットでみ舎主宰)

斎藤 歩(札幌座チーフディレクター)

土田 英生(MONO代表)

畑澤 聖悟(劇団「渡辺源四郎商店」店主)

前田 司郎(五反田団主宰)

詳細は、北海道舞台塾のホームページをご覧ください。
北海道舞台塾 <http://hokkaido-butaijyuku.jp>

平成28年度
北海道文化財団

共催・助成・主催事業募集

■募集対象事業

○共催事業

まちの文化創造事業(シアター・ギャラリープログラム)

アートシアター鑑賞事業

(道内・道外アーティストプログラム、ネットワーク型公演)

○助成事業

文化交流事業(発信・招へい交流)

○主催事業

アドバイザー派遣事業 / 舞台創造支援事業

文化の宅配便事業 / アート体感教室事業

若手芸術家発表事業

■募集期間:平成27年12月8日(火)～平成28年1月29日(金)

■募集要綱・申請方法:詳細は、当財団のホームページ(<http://haf.jp>)でご案内しています。

■問い合わせ:(公財)北海道文化財団

☎011-272-0501